

世界災害語り継ぎフォーラム（2010年3月、神戸）について

世界災害語り継ぎフォーラムの開催

世界災害語り継ぎフォーラム実行委員会（委員長 林勲男（国立民族学博物館准教授）は、国際交流基金、兵庫県、国立民族学博物館、日本財団、読売新聞大阪本社、JICA 兵庫センター、人と防災未来センターなど助成または協力を得て、2010年3月20日・21日に神戸で「世界災害語り継ぎフォーラム」を実施した。

本フォーラムでは、アルジェリア、オランダ、イタリア、アルメニア、トルコ、ネパール、スリランカ、バングラデシュ、ミャンマー、インドネシア、中国、台湾、米国、エルサルバドル、日本など世界各地の22か所の被災地及び国連国際防災戦略/国際復興プラットフォーム、世界博物館協議会歴史考古学委員会などから約150名が参加し、40を超える災害体験の語り継ぎ事例が報告され、語り継ぎ意義や方法などについて活発な意見交換が行われた。



なぜ語り継ぎに関するフォーラムなのか

多くの被災地で、災害の体験や教訓を言葉や映像、事物や記念碑、芸術活動など様々なかたちで語り継いでいこうとする活動が生まれている。そうした活動は、地域の歴史を伝え、人々との絆や自然との共存の在り方、そしてかけがえのない命の大切さを考えさせるものである。語り継ぎは、生命や環境を守るといふ人びとの意識を高め、被災地の復興や、災害に強い地域づくりを進める原動力にもなり、さらには地域を越えた連帯の意識を生み出すなど、社会全体にとって多くの可能性をもった重要な活動である。世界各地の災害被災地では、こうした語り継ぎへの取り組みがおこなわれている一方で、個別の活動を繋ぐ情報の交換や交流の促進のためのネットワークがいまだ形成されていない。

このような問題意識のもと、世界各地で災害の語り継ぎに取り組む人々の交流を深めること、語り継ぎの重要性を広く訴えること、語り継ぎの意義やあり方を検討しあうこと、災害の語り継ぎを各地でさらに促進し、将来の災害に立ち向かう力を育むことを目的として、このフォーラムが催された。

フォーラムのテーマ

語り継ぎの動機：人々はなぜ、誰に対して、何のために災害体験を語り継ごうとするのか。

語り継ぎの意義：語り手にとって、受け手にとって、被災地や社会全体にとってその意義は何か。

語り継ぎの方法：語り継ぎの効果的の方法は何か。ミュージアムにどのような役割を期待する。

公開シンポジウム「災害体験の語り継ぎを考える」

初日には鼎談とパネルディスカッションが開催された。鼎談では、河田恵昭（人と防災未来センター長）が、震災を経て「防災研究は社会に役立つものであるべき、被災者を正面に見据えた研究が必要」と気付いたと述べ、実践科学としての防災研究の重要性を訴えた。ティン・エイ・エイ・コ（在ミャンマー語学学校校長）は、神戸での被災者としての体験を活かして母国で実践している被災地支援の活動を紹介し、かつての被災地が新たな被災地を支援するという支援の連鎖の世界的広がりを具体的に示した。臼井真（神戸市立明親小学校教諭）は、「神戸の街が復活して欲しい」との思いを「しあわせ運べるように」に込めたと述べ、そのような思いを伝えることのできる力を持つ音楽が災害の語り継ぎにおいて果たす役割の大きさを訴えた。

パネルディスカッションでは、山本健一（人と防災未来センター副センター長）、ドナ・サイキ（太平洋津波ミュージアム館長）、サイデュール・ラーマン（バングラデシュ災害予防センター所長）の三名からそれぞれの活動が報告され、コメンテーターである坂戸勝（国際交流基金理事）、サンジャヤ・パティ（国連国際防災戦略/国際復興プラットフォーム）も交えて語り継ぎの意義や方法、今後の展開などについて討論が行われた。討論では、「若い人たちが子どもたちに語り継ぐことによって、語り継ぎが語り継ぎを誘発することを期待」、「民謡や民話、詩などの伝統的な方法で地域の人々の心に訴えることが大切」、「施設の運営資金は僅かであるが、多くのボランティアの協力がある」、「今回のフォーラムに参加して私たちが長年やってきたことが正しかったことが確認できた」、「災害の発生は稀なものであるが、国を隔てて災害の記憶を交換し共有すれば、日々に災害の記憶が蘇る」、「フォーラムは「兵庫行動枠組み」の重要項目の一つである防災教育と防災意識の啓発に資するもの」、「語り継ぎのメカニズムやミュージアムのノウハウは災害復興に取り組む国々にとって大変有益」などの発言があった。



各地からの報告

二日目には「語り継ぎとミュージアム」「語り継ぎと防災」「語り継ぎとメディア」「語り継ぎと交流」に関するセッションが開催された。「語り継ぎとミュージアム」セッションでは、浅間山噴火・泥流(1783)、安政南海地震津波(1854)、北海道南西沖地震津波(1993)、米・サンフランシスコ地震(1906)、有珠山噴火(1910, 44, 77, 2000)、オランダ・ゼーラント州高潮・洪水(1953)、米・ハワイ津波(1946, 1960)、イタリア・スタバ溪谷での鉦滓ダム決壊(1985)、アルメニア地震(1988)、雲仙普賢岳噴火(1991)、阪神・淡路大震災(1995)、トルコ・マルマラ地震(1999)、台湾・921大地震(1999)、エルサルバドル地震(2001)、インド洋大津波(2004)、米・ハリケーン・カトリーナ(2005)、中国・四川大地震(2008)などの災害を語り継ぐミュージアムなどから約20件の報告があった。それぞれの取り組みは多様であり、行政が主体となった運営体制やボランティアが大きな役割を果たす運営体制、災害直後だけでなく災害復興過程も対象にしたもの、歴史の叙述・描写を重視するものや将来の防災・減災を重視するもの、展示だけでなく時空を越えた人と人との出会いの場としてミュージアムをとらえる考え方、ミュージアム内だけでなく館外で展開する多様な語り継ぎ活動も展示のアイテムとしてとらえる考え方などが紹介された。

「語り継ぎと防災」セッションでは、ネパール、アルジェリアなど6か国から参加した防災研究者が、災害の語り継ぎと防災や社会の発展との係り合いなどについて報告した。「語り継ぎとメディア」セッションでは、米、スリランカ及び日本のジャーナリスト約10人が、災害の語り継ぎにおいて重要な役割を担うマスメディアのこれまでの活動、今後の展望と課題などについて報告と意見交換を行った。「語り継ぎと交流」セッションでは、インドネシア・ジョグジャカルタや米・ニューオーリンズ、神戸ほか各地で災害体験を次の世代や他の地域に語り継ぐ活動を行っている NGO 関係者がそれぞれの活動を報告した。

まとめ

阪神・淡路大震災の10周年にあたる2005年1月に、神戸において国連防災世界会議が開催され、その1年後の2006年1月、今回のフォーラムの母体となる「世界災害語り継ぎネットワーク (International Disaster Transfer Live Lessons Network、通称 Tell-Net)」が設立された。そして設立から4年後に、「世界災害語り継ぎフォーラム」を同じ神戸の地で開催することができた。

現在、フォーラムでの報告の概要と発表資料、各セッションのまとめ、参加者の活動に関する情報などをウェブサイトに掲載する作業を進めている。将来的には、災害語り継ぎに関心を持つ多くの人びとの間での情報の共有と交流の促進、そしてその結果として、災害被災地の復興や将来の防災・減災に結びつく活動を活性化に貢献するポータルサイトの構築を目指していきたい。同時に次回のフォーラム開催の可能性も検討していくこととしたい。